



開催期間

令和 7 (2025) 年

6 月 18 日 (水)

→ 8 月 31 日 (日)

遺跡に残る 沖縄戦の爪痕

令和 7 年度 沖縄県立埋蔵文化財センター 企画展



会場

沖縄県立埋蔵文化財センター
企画展示室
エントランスホール

◆ 展示会図録 ◆

遺跡の発掘調査を行う中で、当初想定していなかった沖縄戦関連の遺構や遺物が発見されることがあります。そこで今回の企画展では、当センターがこれまでに実施した発掘調査事例から明らかになった沖縄戦の一端を伝えます。

そのほか、当センターが平成 22 ～ 26 年度に実施した戦争遺跡詳細確認調査のパネル展も開催します。

目次



ごあいさつ	1
1. 戦争遺跡とは	2
2. 戦争遺跡詳細確認調査について	2
3. 沖縄戦以前の戦争遺跡	4
4. 沖縄戦の戦争遺跡	4
5. 発掘調査で見つかった戦争関連遺構と出土遺物	5
【整備に伴う遺構確認調査】	
・ 首里城跡の発掘調査	5
・ 中城御殿跡（旧県立博物館跡地）の発掘調査	7
Column 1：「戦時下の中城御殿と隠された位牌」	8
【諸開発に伴う記録保存調査】	
・ 中城御殿跡（首里高校内）の発掘調査	10
・ 普天間古集落の発掘調査	12
Column 2：「壕跡から見つかった戦没者人骨」	14
・ 神山古集落の発掘調査	15
・ 湧田村跡の発掘調査	16
6. 第32軍司令部壕の発掘調査	19
おわりに・沖縄県内の文化財指定戦争遺跡一覧	24
引用・参考文献	25

【凡例】

1. 本図録は、令和7年度沖縄県立埋蔵文化財センター企画展『遺跡に残る沖縄戦の爪痕』〈開催期間：令和7（2025）年6月18日～8月31日〉の展示を補完するものとして編集・作成しました。
2. 展示及び図録の企画・編集は金城貴子が行い、図録の原稿は当センターの仲座久宜・大堀皓平・金城貴子・照屋匠美のほか、沖縄県教育庁文化財課の片桐千亜紀が担当しました。執筆分担は各項目の文末に表記し、表記のない箇所は金城が執筆しました。
3. 文化財保護・教育普及・学術研究を目的とする場合は、著作権（発行）者の承諾を得なくても、本図録を複製して利用できます。ただし、利用にあたっては出典を明記してください。

ごあいさつ



1945（昭和 20）年のアジア太平洋戦争末期におこった沖縄戦においては、日米両軍の間で激しい地上戦が繰り広げられました。その沖縄戦から 80 年を迎える今日、現在でも県内各地には様々な「戦争遺跡」が数多く残されています。これらの戦争遺跡については、これまで特に平和学習の観点から活用されてきました。

1995（平成 7）年には、広島県にある「原爆ドーム」が国の史跡となり、その後 1996（平成 8）年には同史跡がユネスコの世界文化遺産に登録されました。これを契機に全国的にも近代以降の戦争遺跡に対する関心の高まりとともに、文化財として保存・活用する動きが広まってきました。

沖縄県立埋蔵文化財センターではこれまで、文化庁の補助を受けて 2010（平成 22）年度から 2014（平成 26）年度までの 5 か年にわたって、県内に所在する 1,077 箇所の戦争遺跡のうち、145 遺跡について詳細確認調査を実施しました。このほか、復元整備を目的とした発掘調査や諸々の開発に伴う記録保存調査を県内各地で実施する中で、沖縄戦関連の遺構やその遺物が見つかることがありました。

今回の企画展では、当センターがこれまでに実施した発掘調査で見つかった沖縄戦関連遺構や遺物を展示し、そこから明らかになった沖縄戦の一端を伝えます。また、沖縄戦の戦争遺跡として初めて県の史跡に指定された第 32 軍司令部壕（首里司令部壕跡）の調査概要についても紹介します。さらに県内の主な戦争遺跡について、その概要を紹介するパネル展示もおこないます。

本展をとおして、私たちの身近にある戦争遺跡にふれることにより戦争遺跡の重要性がより広く認識され、その保存・活用が図られるとともに平和について考える機会となれば幸いです。

令和 7 年 6 月 18 日

沖縄県立埋蔵文化財センター

所 長 池田 潤

1. 戦争遺跡とは

戦争遺跡とは、主に戦時中に構築された軍事施設や避難・被災した場所をはじめ、戦争に関連する様々な痕跡を指し、日本においては近代以降の戦争に伴う遺跡を対象としています。沖縄県では、沖縄戦に関連する戦争遺跡のほか、沖縄戦以前の近代以降の戦争遺跡も存在します。

沖縄県教育委員会では、戦争遺跡の保存・活用を図ることを目的に、文化庁の補助を受けて1998（平成10）年度から2005（平成17）年度にかけて戦争遺跡の分布状況を把握する調査を実施し、979箇所を確認しました。

2. 戦争遺跡詳細確認調査について

さらに、2010（平成22）年度から2014（平成26）年度にかけて、県内の戦争遺跡についてその性格や内容をより詳細に確認し、今後の文化財指定も念頭に置いた戦争遺跡の考古学的な調査を実施しました。前回の調査と同様に文化庁の補助を受けて実施したこの調査では、2014（平成26）年度時点で把握されていた1,077箇所の戦争遺跡のうち、歴史性・残存状況・遺構の特徴などから重要と判断された145遺跡について詳細な確認調査を実施し報告書に掲載しました。今回の企画展では、その内容からいくつかを紹介します。

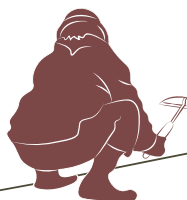
沖縄県内の戦争遺跡の件数は、これらの調査以前に失われたものや、まだ把握されていないものを含めると、その数倍に及ぶと考えられます。



崎枝の海底線陸揚室跡（電信屋） 全景
石垣市



旧美里村の忠魂碑
沖縄市





座喜味の掩体壕 正面
読谷村



津堅新川・クボウグスクの砲台跡 砲台
うるま市



渡嘉志久海岸の特攻艇秘匿壕跡
渡嘉敷村



狩俣ヌーザランミの特攻艇秘匿壕跡群 遠景
宮古島市



沖縄陸軍病院南風原壕 整備された 20 号壕の出口
南風原町



旧西原村役場壕跡
西原町



しらみず
白水の住民避難地跡 カマド跡
石垣市



伊江村公益質屋跡の弾痕
伊江村

3. 沖縄戦以前の戦争遺跡

1879 (明治 12) 年 3 月、明治政府は軍隊と警察隊を派遣して琉球藩を廃止し、沖縄県を設置する、いわゆる「琉球処分」を行いました。その後、1894 (明治 27) 年の日清戦争では日本が勝利し、台湾を領有すると、沖縄は軍事上重要な位置を占めることになり、様々な軍事施設が建てられました。また、日露戦争の後には、愛国心や戦意を高めるための施設が多く建てられました。

このような沖縄戦以前の戦争遺跡は、89 箇所が確認されています。

4. 沖縄戦の戦争遺跡

1. 沖縄戦の戦争遺跡とは

沖縄戦の戦争遺跡は、第 32 軍が創設された 1944 (昭和 19) 年 3 月 22 日以降に構築または使用されたものから、米軍上陸以降に各地に造られた民間人収容所までを含みます。過去に沖縄県教育委員会で実施した調査では、988 箇所が確認されています。主な遺跡の種類として、軍に関わるもののほかに、防空壕、役場壕、破壊痕跡、被災痕跡などがあります。

2. 沖縄戦の経過

沖縄戦は、米軍が慶良間諸島に上陸した 1945 (昭和 20) 年 3 月 26 日から、米軍との降伏調印式を行った 9 月 7 日までの期間と捉えられています。

米軍は 1945 (昭和 20) 年 3 月下旬から沖縄本島各地で空襲や艦砲射撃を行い、3 月 26 日には慶良間諸島へ、4 月 1 日には本島中部西海岸へ上陸し、同月 3 日には本島を南北に分断しました。それ以降 5 月にかけては日米の攻防が繰り広げられ、嘉数高地や前田高地をはじめ、宜野湾・浦添・西原・中城で激しい戦闘が行われました。

しかし、浦添・西原が米軍に突破され、第 32 軍司令部のある首里へ迫ってきたことにより、司令部は 5 月 27 日に本島南部の糸満市摩文仁へ撤退しました。米軍は徹底した掃討戦を行いながら南下し、6 月 21 日には司令部壕のある摩文仁へ達しました。南部には多くの住民が避難していたため、軍民が混在する戦場となり、多くの民間人が犠牲となりました。追い詰められた第 32 軍司令官の牛島満と参謀長の長勇は摩文仁司令部壕内で自決し、これにより沖縄の組織的戦闘が終結したとされています。しかし、司令部が戦闘継続の軍令を出していたために残存部隊は戦闘を継続していたことから、戦闘終結を示す沖縄の降伏調印式が行われたのは 9 月 7 日となりました。

5. 発掘調査で見つかった戦争関連遺構と出土遺物

沖縄県立埋蔵文化財センターでは、これまで県内各地で遺跡の発掘調査を実施してきました。その中で、当初想定していなかった沖縄戦の痕跡が残る遺構や遺物が発見されることがあります。今回は、そのような事例の一部を紹介します。

【整備に伴う遺構確認調査】

遺跡の復元整備を目的として遺構の残存状況を把握するために実施する発掘調査が挙げられます。ここでは主な事例として、首里城跡や中城御殿跡（旧県立博物館跡地）を紹介します。



◆ 首里城跡の発掘調査

那覇市首里当蔵町に所在する首里城跡は、グスク時代（中世）から近代までの約 450 年間にわたり存在した琉球国の王城であり、政治・経済・文化の中心としての役割を果たしてきました。その首里城跡及び周辺の地下には、沖縄戦を指揮した第 32 軍司令部の壕が構築されたことも影響し、米軍の砲撃により正殿をはじめとする建造物は焼失し、城壁の多くが破壊されました。

この首里城跡では、沖縄県が本土復帰した 1972（昭和 47）年に復元整備を目的とした発掘調査の実施が決まって以降、2018（平成 30）年度の美福門礎道地区の発掘調査までほぼ全域において、遺構の残存状況を確認するための発掘調査を実施してきました。

調査を実施する中で、沖縄戦時に爆撃を受けた痕跡や防空壕など、沖縄戦に関連する様々な遺構が見つかっています。

中でも、2012（平成 24）年度から 2013（平成 25）年度にかけて実施した東のアザナ北地区の発掘調査では、首里城内の物見台である「東のアザナ」の崖下から 4 箇所の壕の入口が見つかりました。発見された壕は、各種記録や証言から沖縄師範学校男子部によって構築された「留魂壕」であることがわかりました。

2 箇所の壕口の前面には、目隠しを目的とした石積が構築されています。通路は幅約 1.8m、高さは 1.5m から 1.8m を測ります。天井及び壁面には坑道内の支柱となる坑木の跡や壕内を掘削した際の工具痕も確認することができます。また、中央の壕内には御真影を安置したと考えられる石敷遺構も確認されています。さらに東端の壕口からは、金属製の活字が多数出土しました。この遺物に関連する情報として、戦時中にこの壕内で当時の沖縄新報社が新聞を発行していたとする証言があることから、活字の出土はこれを裏付けるものとして重要です。（金城貴子）



留魂塚



塚1の様子



石敷遺構

留魂塚内平面図

◆ 中城御殿跡（旧県立博物館跡地）の発掘調査

次期国王となる世子の屋敷である中城御殿は当初、現在の首里高校内に創建されましたが、風水上の吉利がないとの判断から 1870（明治 3）年に龍潭北側の大村按司などの屋敷地へ移転することが決まり、1873（明治 6）年に竣工、1875（明治 8）年に世子が移住します。その後、1879（明治 12）年には琉球処分により首里城を追われた国王一族は中城御殿に一時転居し、まもなく東京に移り住むことになります。しかし中城御殿は、その後も沖縄の尚家邸として存続しました。

太平洋戦争が始まると屋敷の一部が陸軍士官^{し かん かんしや}の官舎となり、1945（昭和 20）年 4 月に米軍の爆撃を受けて焼失しました。

戦後は一時引揚者のバラック、首里市役所、首里バス会社、琉球政府立博物館、沖縄県立博物館を経て、現在は中城御殿の復元工事が進められています。

発掘調査は、2007（平成 19）年度から 2023（令和 5）年度にかけて遺構確認を目的として実施されました。この調査によって、中城御殿の多数の遺構や遺物が発見されましたが、それとともに沖縄戦によって焼失した際の痕跡も見つかっています。（大堀皓平）



遺構上に残る焼けた木材や焼土・瓦礫^{しょうど がれき}

石造の遺構（左）や埋甕^{うめがめ}（右）の直上には炭化した木材や焼土、瓦礫などが覆っていた。建物焼失の際に木材や屋根瓦が崩れ落ちて建物が埋没した状況をうかがい知ることができる。



戦禍を受けた希少資料^{せんか}

爆撃により空いた穴からは、青銅製の祭祀具^{さいしぐ}とみられる多数の金属製品の残骸が発掘された。金属製品の下には瓦礫が溜まっていることから、戦後に破損・散乱していた金属製品を集めて埋めたと考えられる（左）。また、本来半透明だったはずの玉製の皿は、激しい熱の影響で割れて変質している（右）。

Column 1: 「戦時下の中城御殿と隠された位牌^{いはい}」

沖縄戦に至る 1943 (昭和 18) 年から翌年にかけて、沖縄県では米軍の空襲に備えて防空壕を掘り住民の避難場所を確保するとともに、「非常持出」として大事な物を非常時に持ち出せるよう県民に呼びかけていました。また、首里においても空襲や災害から市民を守るために警防団が組織されていました。これに関連する証言として、「尚家の屋根に登って対空監視をする警防団幹部がいた」とするほか、「虎頭山の壕には首里の石垣を片端から崩す部隊があり、御殿や殿内の立派な石垣も崩され」、「その石は、1944 (昭和 19) 年末から飛行場を作る際の基礎として使われていた」としています。また、「尚家の裏門のところは戦車が通れないように石垣の石を積んであって通れず、他家の家づたいに飛び越えてアダニガーの壕に移動した」とする証言もあります。これらの証言から、中城御殿は軍に管理され、警防団員が屋根に登れるような状態であったこと、また米軍の通行を妨げる目的で屋敷の石積を崩し、道路に障壁を築いていたこともみえ、その際に中城御殿の石積も崩された可能性を示唆しています。

次に、中城御殿に保管されていた宝物の避難に関する真栄平房敬氏の証言を一部要約して紹介します。

琉球処分後、尚家と称されていた中城御殿でも戦争の被害を憂慮し、施設を管理運営する職員などにより、宝物の避難について検討が進められていました。しかし宝物の量が膨大で大型の製品もあるため、持ち出しても保管する施設がなく、戦時下のため運搬する労務者を雇うこともできない状態でした。

そのような中、尚家の一部を宿舎としていた日本軍の作戦参謀、長野英夫少佐が発した「大丈夫」という言葉を尚家職員らは信じ、御殿内で宝物を保管することになりました。これを受け、樹木が鬱蒼と茂る上之御殿一帯は米軍機からも見えない安全な区域と考え、建物内と周辺の岩陰、地下に構築した防空壕や暗渠、井戸付近に日本軍が建てた風呂場のほか、2 台の大金庫などに分散して宝物を避難させることになりました。

そして各所に、国王らの儀礼衣装・道具類一式や歴代国王の肖像画「御後絵」を含む書画、各地で生産された陶磁器類、中国から伝来した楽器一式、黄金簪、国王・王族の位牌のほか、『おもろさうし』や『中山世鑑』などの貴重な書物類を避難させました。しかし大半の宝物や文書類は避難させることができず、御殿の中に置いたままの状態でした。真栄平氏は「3 月末からその手助けをしていた」ことから、本作業は尚家職員によりそれ以前から行われていたとみられます。

これらの宝物類の多くは戦災により焼失したか、戦後その一部がアメリカから返還されている実績から、戦時中に国外へ持ち出されたと考えられています。このような中で2010（平成22）年度に実施した発掘調査では、石造の暗渠内からブリキ缶に収められた位牌が見つかっています。これまでの証言と照らし合わせると、この位牌も多くの宝物と同様、戦時中に避難させたものと考えられます。

1945（昭和20）年3月27日に中城御殿にはじめて米軍による空爆が行われ、5月上旬には中城御殿を含む首里大中一帯は壊滅します。その際に宝物を管理していた尚家職員5人は戦死していることから位牌の存在は忘れ去られ、それから65年後に実施された発掘調査により日の目を見ることになります。（仲座久宜）



位牌発見状況



出土した位牌

【諸開発に伴う記録保存調査】

開発行為などに伴い、現状のまま保存することができない遺跡について、記録による保存を行う目的で実施した発掘調査の事例を紹介します。

◆ 中城御殿跡（首里高校内）の発掘調査

中城御殿は、琉球国の次期国王となる世子が生活および執務を行った施設のことです。
尚豊王代（在位 1621～1640）に創建されますが、現時点で 1700 年代に描かれたとされる「首里古地図」以外にその様相を伝える記録はありませんでした。しかし、首里高校の新校舎建築に伴い 2013（平成 25）年度から 2021（令和 3）年度にかけて行われた発掘調査により、これまで古地図でしかみられなかった建物跡の一端が極めて良好な状態で現地に残されていることが確認されました。

この中城御殿が 1875（明治 8）年に現在の旧県立博物館跡地に移転すると、その跡地は薬草園となり、その後は国学、沖縄県立第一中学校を経て、現在の首里高校が建てられます。

沖縄県立第一中学校は沖縄戦当時、県内屈指の進学校でしたが、学生達は鉄血勤皇隊や学徒隊として戦地に動員されたことにより、学校関係者を含む多くの方が犠牲となりました。第 32 軍司令部が置かれた首里城を中心とする首里一帯は激戦地となります。1945（昭和 20）年 4 月 20 日には米軍の砲撃が校舎に着弾したとされ、米軍占領時には首里教会と弾痕の残る沖縄県立第一中学校の建物のみが残っているという状況でした。このような激戦を裏付けるように、発掘調査では沖縄戦時の爆撃によりできた穴が複数確認されています。

北側石牆に残る爆弾穴

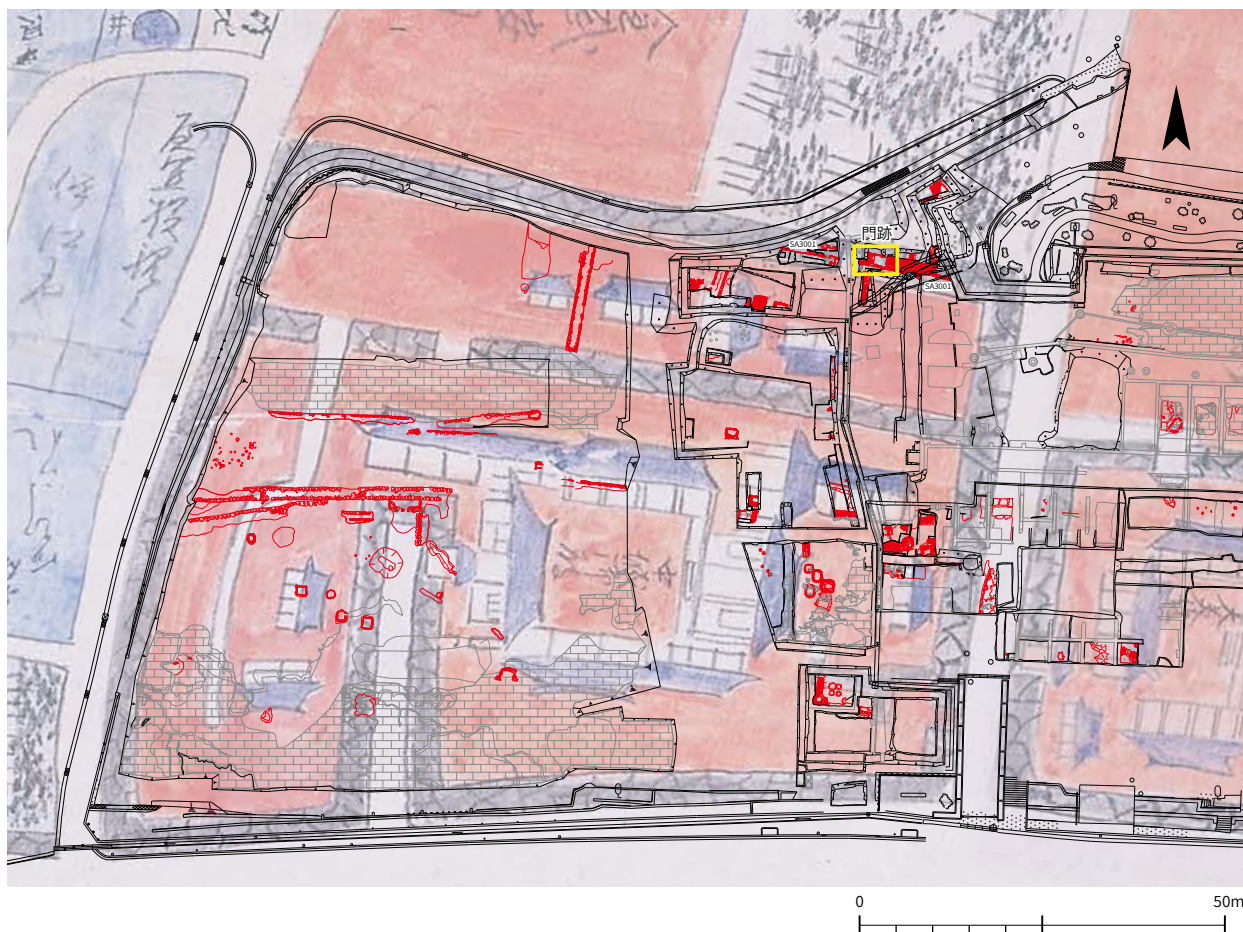
石牆とは屋敷地を囲う石積のことで、その一部が首里高校の北側にある正門付近で確認されました（写真左）。石牆には門が設けられており、「首里古地図」に重ねるとほぼ同位置に入口が描かれることから（右ページ上図黄枠内）、同遺構は中城御殿跡の北側石牆と考えられました。また、門の間口が多量の礫で埋められていたことから、その後増築を行っていたことも判明しました（写真右）。遺構上部には沖縄戦時の爆弾穴が 2 箇所確認できました（右ページ下図）。このことから、増築後に地表面に露出していた部分については破壊され、当初どのような状況であったのかを確認することはできませんでした。しかし、これにより石牆は増築しながら機能し続け、移転後も撤去されることなく現位置に所在していたことが分かりました。（照屋匠美）



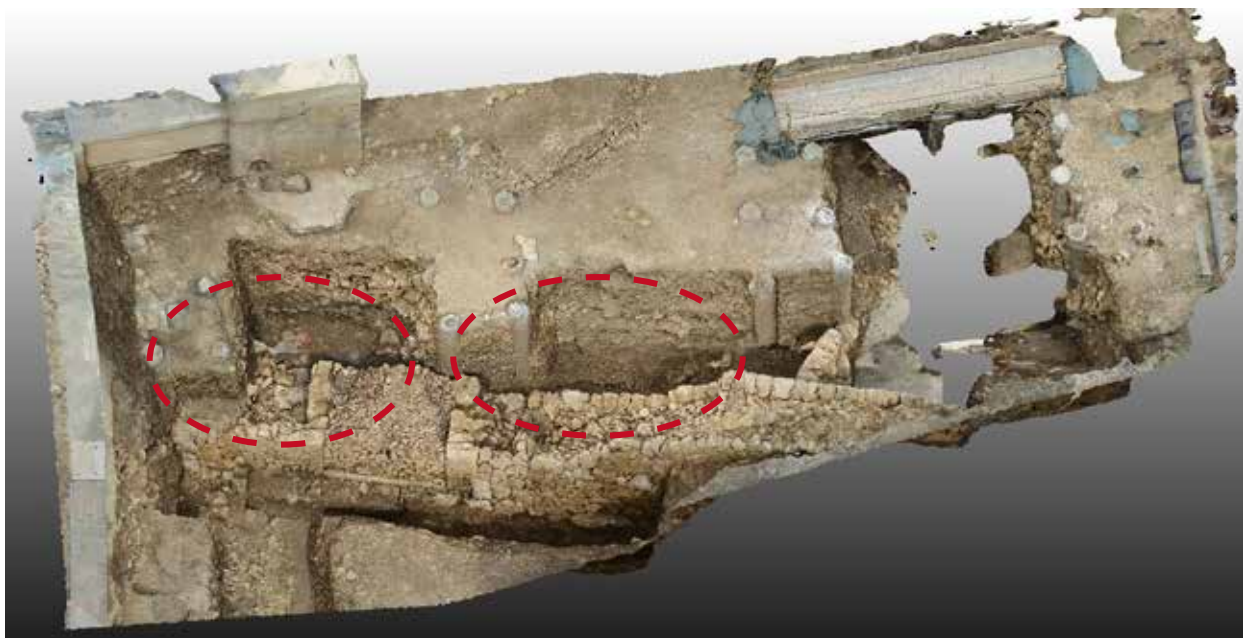
北側石牆検出状況



石で埋められた門跡



門跡位置図（「首里古地図」1910年 具志氏模写図：沖縄県立図書館所蔵 CCBY4.0 に加筆）



北側石牆に残る爆弾穴（赤色破線範囲）

◆ 普天間古集落の発掘調査

キャンプ瑞慶覧内に所在する普天間古集落は、沖縄戦後にキャンプ瑞慶覧建設のため米軍に接収された区域の一角に所在する近世から近代を主体とする集落跡です。

在沖米軍の海軍病院建設に伴う記録保存調査として、沖縄防衛局の委託を受けて2008（平成20）年度から2013（平成25）年度にかけて発掘調査を実施しました。その結果、縄文時代の竪穴状遺構（住居）やおとし穴の可能性のある大型土坑、グスク時代の掘立柱建物跡や耕作の痕跡が確認されたほか、調査の主体となった近世から近代の遺構としては、普天間古集落に関する屋敷地や畑等の区画を示す溝跡や道跡をはじめ、建物跡、土坑、方形石組遺構、井戸、窯跡などが見つかりました。このような調査の過程で、壕跡などの沖縄戦に関連する遺構が複数発見されました。

見つかった壕跡の平面は、2箇所の出入口をもつ「コ」の字状の形状をしており、壕口から内部へ向かって階段状に下る構造となっていました。壕口は幅約70cmから80cm、内部は北東方向へ約4.5m、幅は1.4mを測りました。これに類似する遺構として壕跡SX033があります。同遺構は天井部分が崩落して埋没していることから当初の形状は明確ではありませんが、わずかに段状に下がる箇所があるため、そこが出入口になることが想定されます。内部は東西方向に約4m、南北方向に約2mから2.4mを測ります。注目されるのが、遺構内から一括で見つかった大量の陶磁器類です。近現代に生産された日本産陶磁器や沖縄産陶器など600点以上が出土しました。上部の製品は土圧により割れていましたが、その多くは完形で碗・皿類を中心に同種の製品が揃っていました。この他にも、土坑から大量の陶磁器類が積み重ねられたケースや、中には木製朱塗りの位牌が出土した土坑もあります。このような出土状況から、戦時中に空襲などから生活用具を守るために隠したものであると考えられ、同様な遺構が遺跡内から複数見つかっています。（金城貴子）



壕跡 完掘状況

調査の安全面を考慮し、天井部分を重機で掘削して調査を実施した。



壕跡 SX033 遺物出土状況



陶磁器と位牌が埋められた土坑



位牌出土状況

積み重ねられた陶磁器と共に位牌が出土。



石組遺構内遺物出土状況



陶磁器出土状況

Column 2: 「壕跡から見つかった戦没者人骨」

発掘調査中に戦没者の人骨が見つかることがあります。それはキャンプ瑞慶覧内に所在する^{ふてん ましちやぼる こぼぐん}普天間下原古墓群の調査での出来事でした。

見つかった^{ず し がめ ぞうこつき}厨子甕（蔵骨器）の銘書から、19世紀後半から近代にかけての普天間古集落に住んでいた人々の墓地と判明した同遺跡の発掘調査では、36基の古墓が確認されました。そのうち1基の^{はかにわ}墓庭から壕跡と人骨が見つかりました。

岩盤を溝状に掘り込んで構築された壕は幅約70cm、深さは墓の前庭検出面から約130cmに達します。人骨は壕の入口と考えられる階段状になった場所であおむけの状態で見出されました。人骨は分析により20代前半の男性で、身長160cm前後であることがわかりました。また、人骨と共に眼鏡や軍靴、ボタンのほか、手りゅう弾のピンと信管などの兵器類が出土していることから、この人骨は沖縄戦時の戦没者の可能性が考えられました。

戦時記録によると、米軍は1945（昭和20）年4月1日に沖縄本島中部西海岸に上陸し、その日のうちに普天間の下原近くまで進撃します。これに対し、日本軍の賀谷支隊（独立歩兵第12大隊）の第一中隊は、同年4月2日に普天間北側台地で南下する米軍と戦闘したとされています。これらのことから、この人骨は賀谷支隊の隊員の可能性があります。

なお、この人骨と共に壕跡から出土した遺物については、資料整理後に戦没者人骨及びその遺品として、沖縄県平和祈念財団の戦没者遺骨収集情報センターに移管しました。
（金城貴子）



19号墓



19号墓前庭の壕跡から出土した戦没者人骨

◆^{かみやま こしゅうらく} 神山古集落の発掘調査

普天間飛行場内に所在する神山古集落は、沖縄戦時の1945(昭和20)年6月に建設が始まった普天間飛行場建設のために接収された区域の一角に所在する近世から近代を主体とする集落跡です。

神山集落には沖縄戦時において日本軍が^{ちゅうとん}駐屯し、物資を補給する^{や せんそう こ}野戦倉庫が設置され、同年4月4日には米軍と応戦した場所でもあります。

普天間飛行場内の冠水防止を目的とした調整池設置に伴う記録保存調査として、沖縄防衛局の委託を受けて2016(平成28)・2017(平成29)年度に発掘調査を実施しました。調査の結果、グスク時代の耕作の痕跡や、戦前の屋敷地の区画や井戸などが見つかりました。また、交通壕やタコツボ、防空壕など沖縄戦に伴う遺構も多く確認されました。

交通壕は、道端沿いに構築された幅0.5m程度の狭い溝で、兵士が身を隠しながら徒歩で移動する際に利用されたものです。タコツボは交通壕の周囲に配置された兵士が隠れるために掘り込まれた深さ1m近くの穴で、壁面には昇降するための^{あしがかり}足掛がありました。

また、防空壕は屋敷地の隅に作られていることが多く、沖縄産陶器壺などの日用品のほか、米軍が使用した^{おうりんだん}黄燐弾や爆弾の破片などが出土しています。また、軍用食器や軍盃などの酒器と考えられる陶磁器のほか、食糧と考えられる豆類も出土しています。神山には日本軍が食糧・燃料を補給するための野戦倉庫が設置されていたことから、これらの遺構・遺物は日本軍が使用していたことを物語っています。(金城貴子)



タコツボ完掘状況
壁面には足掛と思われる凹みが確認できる。



陶器壺が多く出土した防空壕



SK043 2つの入口がある壕



SK043 完掘状況

◆わく た むらあと湧田村跡の発掘調査

湧田村は、現在の沖縄県庁から那覇市役所一帯に所在していた集落で、1616（万暦44・元和2）年にこの地に瓦や陶器を生産する湧田窯が開かれ、沖縄で本格的な窯業が開始された地として知られています。1920（大正9）年に沖縄県庁が現在の泉崎に移設されると、沖縄県を中心地として近代的な都市景観が形成されましたが、1944（昭和19）年10月10日の「10・10空襲」で大部分が焼失しました。

沖縄県立埋蔵文化財センターでは、2024（令和6）年度より沖縄県防災危機管理センター棟（仮称）建設に伴って発掘調査を行っています。調査の結果、近代の湧田村跡のまちなみが検出されましたが、それと共に「10・10空襲」の痕跡とみられる焼土や瓦礫の土層が湧田村の遺構を覆うように検出されました。（大堀皓平）



発掘調査現場遠景

那覇の中心地だが、約1000㎡の調査区のほとんどで遺構が残されていた。赤黒い部分は村の遺構が焼土や炭に覆われている箇所である。奥に見えるのは現在の沖縄県庁。



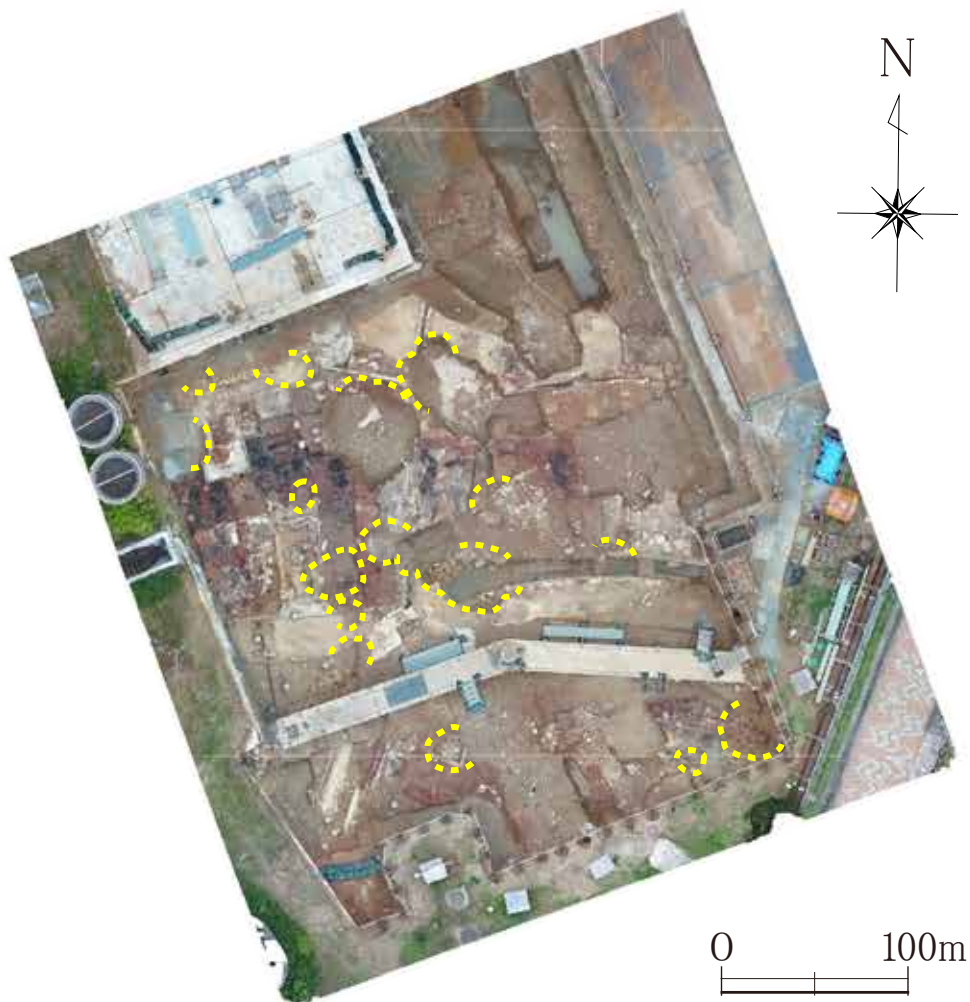
発掘調査の様子

湧田村跡の遺構は、焼土・瓦礫層を掘削した下部から検出された。



爆弾穴とみられる土坑

石造の道と水路（左）、モルタルの床（右）がクレーター状に^{えぐ}凹んでいる。また、土坑は瓦礫で埋まっていた（右）。



爆弾穴とみられる土坑の分布状況

調査現場の広範にわたり土坑が分布している状況が確認される。また、これらは特に画像左上の建物跡とした区画が検出された調査区エリアに集中している。



遺構と焼土・瓦礫層の堆積関係

湧田村跡の遺構上に木材が焼けた炭・焼土層があり、その上に瓦礫層が堆積している。
遺構と炭・焼土層の間からは、戦時中に生産された統制陶器や金属の代用品である焼き物などが出土することから、証言や記録と合わせると、これらは「10・10 空襲」により形成された可能性が高い。



遺跡に残る沖縄戦（10・10 空襲）の痕跡

瓦礫層によってバックされた陶磁器（左上）、鉄骨や建物の木材（右上）、割れた板ガラス（左下）、瓦礫に覆われた建物跡（右下）などが確認された。

6. 第 32 軍司令部壕の発掘調査

1. はじめに

第 32 軍司令部壕（以下「首里司令部壕跡」）は、沖縄戦の指揮をとった第 32 軍が用いた壕跡であることから、沖縄戦の実相を伝える遺跡といえます。第 32 軍は 1944（昭和 19）年 3 月に大本営直轄のもと南西諸島防衛を目的として創設され、司令部は沖縄本島に置かれました。当初、南風原町津嘉山で壕の構築が開始されましたが、地盤が軟弱であったことから、10・10 空襲以後はより強固な壕の構築を目的に首里城周辺の地に変更し、最終的には糸満市摩文仁の壕で終焉を迎えました。

首里司令部壕は 1944（昭和 19）年 12 月には構築が開始され、米軍上陸が間近となった 3 月 23 日頃には本格的に使用されていたと考えられています。司令部が設置されて以降も壕の拡張は続けられていたようですが、米軍の侵略により 5 月後半に司令部を南部に移動させたことによって放棄され、米軍の管理下となりました。

米軍が壕の内部に入ったときには、すでに各所が崩落していたと報告されています。壕はその後崩落が進み続け、現在では第 5 坑口以外の坑口も埋没してその所在は不明のままとなっていますが、第 1 坑口については今回の調査によりその場所が明らかとなりました。

2. 調査経過

これまで 1958（昭和 33）年に沖縄観光協会及び琉球政府による調査が行われ、その後 1962・1963（昭和 37・38）年には沖縄県観光協会及び那覇市による調査、1965（昭和 40）年には那覇市及び琉球政府による調査、1968（昭和 43）年には沖縄観光開発事業団による調査が行われ、遺骨や遺品が発見されるなどの成果が得られています。

その後、1994・1995（平成 6・7）年には沖縄県による調査が行われ、第 2・第 3・第 5 坑道の掘削にともなって崩落防止・安全対策措置として支保工等の設置工事が行われています。特に第 5 坑道の掘削では多くの遺物が回収され、現在は平和祈念資料館に保管されています。第 2・第 3 坑道は坑口が不明ですが、新たに設けた縦坑の掘削により進入に成功し、坑道の位置を特定できたことが大きな成果となりました。

そして 2021（令和 3）年度からは、各関係機関の協力を得つつ沖縄県によって「第 32 軍司令部壕保存・公開検討委員会」が発足し、保存・公開を目的とした調査が継続的に実施されています。

3. 当時の主な記録

首里司令部壕跡の詳細については、いくつかの証言や史料が現存します。日本軍のものは『第 32 軍司令部日々命令綴』が壕内の配置を知る上で重要であり（第 1 図）、米軍記録としては『Intelligence Monograph（インテリジェンス・モノグラフ）』が壕の位置と形態を知るうえで重要です（第 2 図）。この『Intelligence Monograph』によると、壕の総延長は 863m 以上で、首里城北側に第 1 から第 3 坑口、南側に第 4・第 5 坑口、さらに 2 つの縦坑口の計 7 つの壕口があったとされています。その内、第 5 坑口が標高 72m と最も低く、そこから北側に向かって高くなり、第 1 から第 3 坑口の標高は 90m から 100m 前後であったと考えられます。

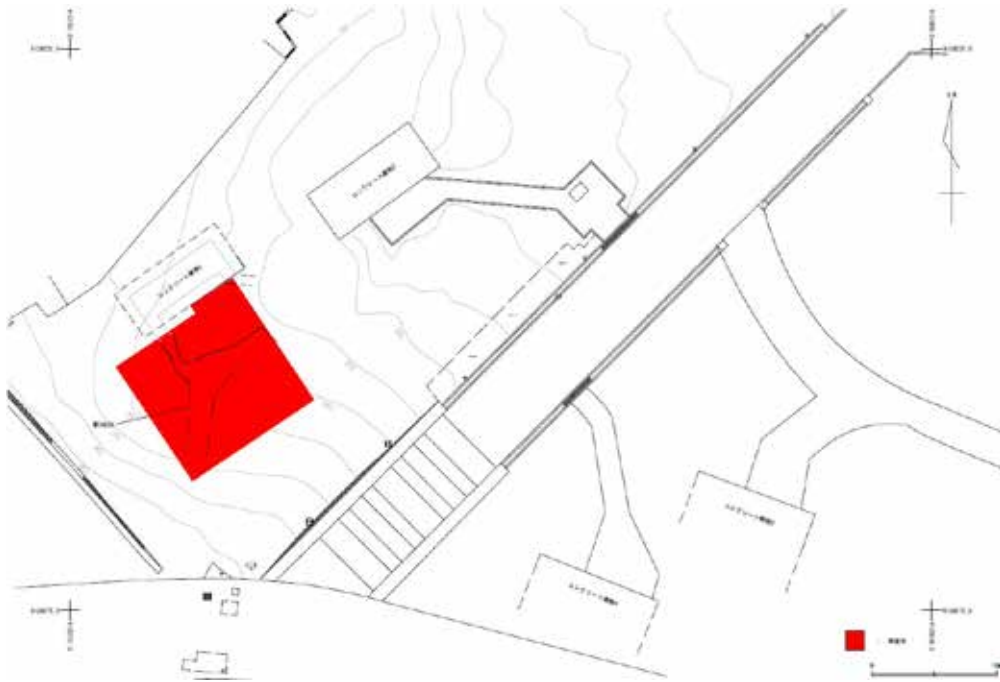
4. 調査成果

2021（令和3）年度から、壕内のレーザー測量調査、現状調査、ボーリング調査、第1・第5坑口の発掘調査を実施しており、今後も継続して実施する予定です。これまでの主な調査成果は以下のとおりです。

- （1） 首里司令部壕跡は、戦後の掘削や支保工等の工事によって一部の改変を受けているものの、現在でも第2・第3坑道及び第5坑道の一部の保存状態、特に壕の形状や当時の状況を知る上で最も重要な床面は良好に保存されていることが確認されました。
- （2） ボーリング調査、測量調査、発掘調査によって一部の範囲とはいえ壕の正確な位置が把握されたことにより、これらが『Intelligence Monograph』に記載された米軍記録とほぼ一致していることが明らかとなり、その正確さを裏付けることができました。
- （3） 第1坑口を再発見し、坑道と外の境界も明確となりました。また、支柱とした坑木や床材に用いられた木材の保存状態も良好でした（第3図）。さらに本坑口は周辺の地上に残されている施設と連携し、複雑な構造を有する可能性もでてきました（第4図）。今後のさらなる調査によって、その構造が明らかになる日があると思われます。



第3図：第1坑口の状況



第4図：第1坑口の調査区及び周辺の状況

- (4) 第5坑口の調査では、その存在が証言にも度々登場するトロッコの軌道（レール）が残されていることが確認されました。また、壕出入口の正面には石積が構築されており、左右に向けて通路が延びていることもわかりました。正面の石積は目隠しの役割を果たしたと考えられ、第5坑口の前面は、外部からその存在を隠すために複雑な構造をしていたことが明らかとなりました（第5図）。また、この石積はレールの上に積み上げられていることから、当該坑口及び壕内部の構築工程も判明しています。これらの成果は、これまで実施されていた文献調査や聞き取り調査ではまったく知られていなかった事実として重要です。



第5図：第5坑口の状況

5. おわりに

首里司令部壕跡は、組織的持久戦を展開して住民を巻き込む結果となった沖縄戦を指揮した第32軍司令部が、米軍の沖縄本島上陸直前から南部撤退に至るまで軍事的中枢として使用されていた場所であり、「戦争の方向性を決定づける判断」がなされてきた沖縄戦の実相を次世代に伝える極めて重要な遺跡です。そのため、沖縄県教育委員会はこれまで実施してきた各種調査の成果に基づき、第2・第3坑道の一部と第5坑口及び坑道の一部を沖縄県指定史跡としました(第6図)。

今後はさらに発掘調査を進め、文献・証言記録と照合しつつ、その実態を明らかにしていきたいと考えています。(片桐千亜紀)



第6図：沖縄県史跡指定の範囲

【沖縄県指定の概要】

令和6年11月29日付け沖縄県教育委員会告示第9号(公報第5271号)

種 別：沖縄県指定史跡名勝天然記念物(史跡)

名 称：第32軍司令部壕(首里司令部壕跡)

指 定 面 積：15,142 m²

所在地及び地籍：沖縄県那覇市首里真和志1丁目7番1 他11筆

指 定 基 準：1 史跡

(3) 古戦場、戦災跡、戦跡、その他戦争に関する遺跡

おわりに



様々な発掘調査に携わる中で、沖縄戦に関連する遺構や遺物が見つかることがあります。意図せず地中から姿を現したこれらの戦争の痕跡から、その場所で起こった戦争の実態を目の当たりにするとともに、あらためて沖縄県内には数多くの戦争遺跡が残されていることを知ることができます。

沖縄戦が終結して80年を迎え、戦争体験者が少なくなっている現状において、戦争遺跡はその実態を後世に伝える場として特にその重要性が高まっています。戦争遺跡を考古学的に調査し、その実態を明らかにすること、さらにその保存を図りつつ、その調査成果を広く公開・活用することが平和について考え、未来へ継承するためにも重要と考えます。

今回の企画展を見て、戦争遺跡について興味を持つことになった方は、ぜひとも近所に残されている戦争遺跡を訪れてみることをおすすめします。そこに立ち、市町村誌等の記録や証言集の情報を合わせることで、80年前に繰り広げられた凄惨な情景がリアルに思い起こされます。戦争の記録を継承するのは、この一歩から始まります。そしてその一歩が今日の平和について実感し、考える契機となるでしょう。



沖縄県内の文化財指定戦争遺跡一覧（令和7年4月現在）

No.	指定年月日	指定区分	指定名称	所在地
1	1972（昭和47）年8月30日	町史跡	下り井戸	竹富町字鳩間
2	1977（昭和52）年12月14日	村史跡	公益質屋跡	伊江村字東江上
3	1977（昭和52）年12月14日	村有形民俗	ミンカザントゥ	伊江村字川平
4	1986（昭和61）年9月25日	市史跡	元海底電線陸揚室（電信屋）	石垣市字崎枝
5	2021（令和3）年8月27日	県史跡	海底電線陸洋室跡（電信屋）	
6	1990（平成2）年6月27日	町史跡	沖縄陸軍病院南風原壕 ※旧称：南風原陸軍病院壕	南風原町字喜屋武
7	1997（平成9）年2月5日	市史跡	奉安殿（戦争遺跡）	沖縄市知花
8	1997（平成9）年2月5日	市史跡	忠魂碑（戦争遺跡）	沖縄市知花
9	2004（平成16）年3月3日	市史跡	新川・クボウグスク周辺の陣地壕群	うるま市勝連津堅
10	2004（平成16）年4月15日	市史跡	海軍特攻艇格納秘匿壕	宮古島市平良字狩俣
11	2005（平成17）年3月1日	村史跡	旧日本軍特攻艇秘匿壕	渡嘉敷村字阿波連
12	2005（平成17）年11月30日	村史跡	集団自決跡地	渡嘉敷村字渡嘉敷
13	2008（平成20）年2月7日	村史跡	チビチリガマ	読谷村字波平犬桑江原
14	2008（平成20）年11月4日	市歴史資料	旧登野城尋常高等小学校の奉安殿	石垣市字登野城
15	2009（平成21）年1月22日	村史跡	掩体壕	読谷村字座喜味
16	2009（平成21）年1月22日	村史跡	忠魂碑	読谷村字座喜味
17	2009（平成21）年3月30日	市史跡	名蔵白水の戦争遺跡群	石垣市字名蔵シーラ原
18	2009（平成21）年11月20日	町史跡	本部監視哨跡	本部町字谷茶
19	2009（平成21）年11月20日	町歴史資料	旧謝花尋常高等小学校跡 奉安殿	本部町字謝花
20	2014（平成26）年3月26日	村史跡	161.8高地陣地	中城村字北上原
21	2015（平成27）年6月9日	町史跡	旧西原村役場壕	西原町字翁長
22	2015（平成27）年7月1日	村史跡	赤松隊本部壕	渡嘉敷村字渡嘉敷
23	2018（平成30）年4月24日	市史跡	ウローカーの砲台跡	南城市久手堅
24	2018（平成30）年4月24日	市史跡	前川民間壕防空壕跡	南城市前川
25	2020（令和2）年4月7日	市史跡 天然記念物	佐事川凝灰岩層及び佐事川の陣地壕	宮古島市城辺
26	2021（令和3）年1月1日	町史跡	忠魂碑	金武町字金武
27	2021（令和3）年1月1日	町史跡	旧億首橋	金武町字金武
28	2021（令和3）年5月11日	町史跡	小波津弾痕の残る石堀	西原町字小波津
29	2023（令和5）年8月9日	市史跡	具志川グスクの壕	うるま市具志川
30	2024（令和6）年11月29日	県史跡	第32軍司令部壕（首里司令部壕跡）	那覇市首里

- ・米国立公文書館 1945 『インテリジェンス・モノグラフ』（陸軍高級副官部文書：RG407「第二次世界大戦作戦報告書」）
- ・防衛省防衛研究所戦史研究センター『第32軍司令部 日々命令綴り（第32軍司令部参謀部航空）昭20.3.29～20.5.22』
- ・琉球政府編 1971「沖縄戦記録1」『沖縄県史 第9巻 各論編8』琉球政府
- ・琉球政府編 1974「沖縄戦記録2」『沖縄県史 第10巻 各論編9』沖縄県教育委員会
- ・那覇市企画部市史編集室編 1981『市民の戦時・戦後体験記1（戦時編）』那覇市企画部市史編集室
- ・沖縄県教育庁文化課（編）1993『湧田古窯跡（Ⅰ）－県庁舎行政棟建設に係る発掘調査－』沖縄県文化財調査報告書第111集 沖縄県教育委員会
- ・沖縄県教育庁文化課（編）1995『湧田古窯跡（Ⅱ）－県庁舎議会議棟建設に係る発掘調査－』沖縄県文化財調査報告書第121集 沖縄県教育委員会
- ・沖縄県立博物館 1996『沖縄県立博物館 50年史』沖縄県立博物館
- ・沖縄県教育庁文化課（編）1997『湧田古窯跡（Ⅲ）－県庁舎警察棟建設に係る発掘調査－』沖縄県文化財調査報告書第129集 沖縄県教育委員会
- ・沖縄県教育庁文化課（編）1999『湧田古窯跡（Ⅳ）－県民広場地下駐車場建設に係る発掘調査－』沖縄県文化財調査報告書第136集 沖縄県教育委員会
- ・国学創建二百年沖縄県立第一中学校・首里高等学校創立百三十周年記念事業実行委員会 2010『目で見える養秀百三十年』社団法人養秀同窓会
- ・財団法人 海洋博覧会記念公園管理財団 2010『首里城尚家関係者ヒアリング調査業務報告書』財団法人 海洋博覧会記念公園管理財団
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター 2011『中城御殿跡（2）－県営首里城公園中城御殿跡発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第58集
- ・山本正昭 2011「沖縄県内の戦争遺跡分布調査－「戦跡」の実態とその意味を考える－」『季刊考古学』第116号 雄山閣
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター 2012『中城御殿跡（3）－県営首里城公園中城御殿跡発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第63集
- ・那覇市教育委員会文化財課 2013『湧田村跡』那覇市文化財調査報告書第96集 那覇市教育委員会
- ・新垣 力 2015「沖縄県の戦争遺跡 留魂壕」『季刊考古学 別冊23 アジアの戦争遺跡と活用』雄山閣
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター 2015『沖縄県の戦争遺跡－平成22～26年度戦争遺跡詳細確認調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第75集
- ・山本正昭 2015「沖縄県の戦争遺跡調査とその課題－沖縄県戦争遺跡詳細分布調査以降の動向から読み解く－」『季刊考古学 別冊23 アジアの戦争遺跡と活用』雄山閣
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター 2016『キャンプ瑞慶覧内病院地区に係る文化財発掘調査報告書3－普天間古集落遺跡－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第83集
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター 2016『琉球窯業の萌芽 湧田古窯跡出土品展 ～琉球陶器誕生400年記念～』
- ・沖縄県教育庁文化財課史料編集班 2017『沖縄県史 各論編 第6巻 沖縄戦』沖縄県教育委員会
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター 2017『キャンプ瑞慶覧内病院地区に係る文化財発掘調査報告書4－普天間古集落遺跡・普天間後原第二遺跡－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第90集
- ・萩尾俊章 2017「真栄平房敬氏の「尚家の宝物」に関する証言記録について」『沖縄史料編集紀要』第40号 沖縄県教育委員会
- ・真栄平房敬（話者）・平川信行（編集）2017「沖縄戦で流出した旧王家の宝物」『沖縄史料編集紀要』第40号 沖縄県教育委員会
- ・真栄平房昭 2017「戦時下の首里と中城御殿－国土が戦場になったとき－」『沖縄史料編集紀要』第40号 沖縄県教育委員会
- ・吉浜 忍 2017『沖縄県の戦争遺跡＜記憶＞を未来につなげる』吉川弘文館
- ・大堀皓平 2018「首里城跡周辺の遺跡より出土する玉器」山崎真治・吉田健太・亀島慎吾『古都首里を掘る』沖縄考古学会
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター 2018『首里城跡－東のアザナ北地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第98集
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター 2019『神山古集落－普天間飛行場雨水排水施設整備に伴う発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第99集
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター 2021『中城御殿跡（首里高校内）・櫛園跡－首里高校校舎改築に伴う発掘調査（2）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第110集
- ・前田勇樹・古波藏契・秋山道宏（編）2021『つながる沖縄近現代史：沖縄のいまを考えるための十五章と二十のコラム』ボーダーインク
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター 2022『普天間石川原第一遺跡・普天間グスクンニー遺跡・普天間下原古墓群－キャンプ瑞慶覧内東普天間住宅地区に係る文化財発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第111集
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター 2023『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡総括報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第114集
- ・天久瑞香 2024『近代の町跡』下地安広・大堀皓平・與那嶺明恵・具志堅清大（編）『沖縄近代考古学～考古学からみた沖縄の近代化と展開～』沖縄考古学会
- ・大堀皓平 2024「考古遺物からみた近代沖縄の時期区分」同上
- ・保坂廣志 2024「首里城と沖縄戦－最後の日本軍地下司令部」『集英社新書1220』集英社

(発行年順)

◆ 関連イベントのご案内 ◆

全て受講料無料

第 101 回文化講座



テーマ

「沖縄県の戦争遺跡詳細確認調査について」
「発掘調査で見つかった沖縄戦の痕跡」
「第 32 軍司令部壕（首里司令部壕跡）第 1・第 5 坑口の構造を発掘調査成果から考える」

開催日時

令和 7 年 6 月 29 日（日） 13：30～16：00（受付 13：00）

場所

沖縄県立埋蔵文化財センター 研修室

講師

金城貴子、大堀皓平（当センター専門職員）、片桐千亜紀（沖縄県教育庁文化財課 主幹）

定員

60 名程度

＼ 文化講座同日に開催 ／

ギャラリートーク



開催日時

令和 7 年 6 月 29 日（日） 16：10～16：40（文化講座終了後）

場所

沖縄県立埋蔵文化財センター 企画展示室

＼ 事前予約必須 ／

フィールドワーク



◆ 第 32 軍司令部壕（首里司令部壕跡）第 1 坑口を解説します ◆

開催日時

令和 7 年 8 月 3 日（日） ・第 1 部 10：30～11：00（集合 10：15）
・第 2 部 13：15～13：45（集合 13：00）
・第 3 部 15：00～15：30（集合 14：45）

場所

第 32 軍司令部壕 第 1 坑口（首里城公園内） 集合場所：守礼門
※少雨決行（中止の際は当センターホームページでお知らせします。）

講師

片桐千亜紀（沖縄県教育庁文化財課 主幹）

定員

各部 35 名 先着順

申込方法

電話による事前申し込み。定員に達し次第受付終了。
受付期間：令和 7 年 7 月 22 日（火）～7 月 25 日（金） 9：00～17：00
予約受付：☎ 098-835-8752 沖縄県立埋蔵文化財センター 調査第 1 班（普及）

沖縄県立埋蔵文化財センター

休所日

月曜日（国民の休日・慰霊の日にあたる場合は翌日に振替）
国民の休日（こどもの日・文化の日を除く）
年末年始（12/28-1/4）
慰霊の日（6/23） ※その他臨時休所あり

開所時間

9:00-17:00（入所は 16:30 まで）

住所

〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7

電話番号

☎098-835-8752/8751

WEB サイト

○ 沖縄県立埋蔵文化財センター

